

四、佛教流傳の豫言―以上は佛陀との直接關係であるが更に今滅後佛法流傳史上の豫言として見らるゝのが佛教東流説である。此に就ては宗祖が屢々大師須梨耶蘇摩の羅什への豫言を引用されて、曾谷入道殿許御書(二二)「此ノ經典東北ニ縁有り予此ノ地文ヲ拜シテ兩眼瀧ノ如シ」

千日尼書(七五)「西天ノ月氏國ハ未申ノ方東方ノ日本國ハ丑寅ノ方也。豈ニ日本國ニ非ズヤ」と日本國と佛法は此の良の方に一關聯を持つものである。

五、傳教大師―此の經東國に縁有りと豫言された法華經が吾が本朝に華を咲かした濫觴は傳教大師であるが、大師が、我が立つそまの叡山はゆくりなくも、都の東北であり、茲に都の守護鬼門の鎮めとして鎮護國家の道場となつたのである。

## 信仰と人間生活

以上の如く一般佛教の上から概觀するに斯く且く五項目に於て見たが、此等は何れも重要な事項に屬するのである。從て此の先天的の關係が傳教大師に至ては此の先天的因縁と東洋思想に發する鬼門の觀念とが結合されて鎮護國家(都の守護)の道場となつたのであらう。而して宗祖であるが、宗祖に於て上記の諸觀念が取入られたのか或は傳教の思想が直接影響せられたのか、此點俄には斷じ得られないが、恐く直接には傳教の思想が自身安住の方向となつたものであらう事は上に引く曾谷鈔の文並に以下に述べんとする曼荼羅座配の上から見て想像される。又宗祖一代の事蹟に照して上記の諸項が宗祖の上にも幾分影響の有つた事も察知し得る。此等の關係並に意義は以下項を改めて述べる。(以下次號續)

## 証音寺惠進

私は曾て心靈學の講義を聴いたことがある。心靈學そのものは一種の科學として未だ研究の途上にあるらしい

然し私の如き凡才には、そのやうには思へないで立派な一つの科學のやうな感じがする。

心靈學にては種族我と個人我の二元論を基礎とし、原理としてゐるやうに思はれる。然らば種族我とは如何なりやと言ふに、種族我は不滅の實在にして、其認識方を靈覺と云ひ、即ち肉眼を使用せずして一切のものを見ることの出来るものである。故にこれ佛敎の所謂佛性の如きものを指すのであると心靈學者は謂つてゐる。これに對して個人我は五感の認識する世界であるから知覺の世界と言ふべきである。

心靈學者は種族我なるものは、生むと言ふ文字にて表はし、個人我をば、作ると云ふ文字をもつて表はして居る。西洋人の思想の根柢は生むと言ふ觀念に非ずして、作ると謂ふ觀念にある。然るに東洋人中特に日本人の思想の根柢をなすものは、生むと言ふ觀念である。故に西洋人の個人主義に對して日本人は奉仕主義であると謂ふことが出来る。然るに東洋人は西洋思想の發達に伴ひ、幽玄なる種族我を失して信仰を失ふに到つたと、心靈學者が主張する如く、これ至極尤もな説だと私は思つてゐる。

だが然し心靈學者が所謂種族我の例證として、過去に死せるところの人間の姿を確實に、且つ判然と見ることが出来ると言ふが如き説は、文明開化の現代に於ては笑

止千萬であり、首肯し難きところである。

靈たるものは飽迄も現實的理論をもつて證明すべきでないと言ふ。故に如何に難行苦行の修驗者と雖も、これは不可能事である。しかし私は偉大なる超人間的、力を有する靈的活動を信じてゐる。靈魂は永劫に不滅なること疑ふ餘地がない。宇宙は神祕の寶藏であることは何人も異論なく肯定するところであらう。我々が神社佛閣に詣でて、拜殿に額突く時、その偉大なる神格靈感に觸れ敬虔の念を生ずる事實を見ても、靈の永遠は明白である。

然るに心靈學者は種族我の徹底せる結果は、過去の死人を眼前に見るの域に達し得ると言ふのである。これ或る意味に於て肯定せらるゝも、現代實社會にその域に達せる靈學者、又は靈媒者が存在してゐるとの主張に對して疑惑を持たざるを得ない、私は皆て種々の靈覺者の不思議な靈媒行爲を聞いてゐるが、それは單に靈感と謂ふ程度のもので決して現實的でないのである。

然るに心靈學者は種族我の徹底せる靈學者には過去に死せる人間の姿が判然と見えると主張し、一般の人には見えぬと言ふのである。即ち一般人は個人我により種族我が障害されてゐるから見えぬと謂ふにある。これ甚だ

疑しい事であり、何人も詭辯論だと叫ぶであろう。

私は斯くの如きものを重要視せぬ、見えても、見えなくとも、どうでもよいのである。宗教的な、眞の信仰に對しては以上の如き理論は、大事の前の小事であると私は信じて止まない。

されば宗教的な信仰とは如何と言ふに、これ活命即ち生活と謂ふ事である。故に人間の日常生活に於て、宗教的信仰なるものを切離して考ふべき性質のものでない、人間生活の最も尊いところは、宗教的信仰あるの所以なりと謂ふことが出来やう。

蓋し宗教的信仰を有しない人々の生活そのものは、實に無價値な、そして無意義なものであると斷言し得る。人間生活をして價値附け、意義を有せしむるところのものは、即ち宗教的信仰の外に何物も存しないのである。然るに實社會に於ては宗教的信仰を有せざる人間が多數存在してゐる。彼等は相當の階級にあつて、無宗教主義を誇張し、得意然としてゐるものも存するのであるが、彼等の生活こそ何等の價値なき動物的下劣の生活なりと謂つても敢て過言ではない。

然らば無宗教主義の彼等は謂ふであろう。宗教的信仰を有しなくとも、人間生活に於て、何等の支障なき事實

を強張するに相違ない、然し單に生活を成すだけならば喧しく論ずる必要はないのである。犬や猫は宗教的な信仰を有せず唯本能的に、何等支障なく生活してゐることは周知の事實である。

されば宗教的信仰を有せざる人々の生活そのものは、犬猫同然の生活に過ぎないと斷定し得ると思ふ。人間が萬物の靈長と謂つて威張つて居られるのは、即ちこの宗教的信念たる信仰の存する所以である。故に宗教的信仰は即人間生活であり。この二者は相即不二の關係にあること明白であろう。私が無鐵砲に宗教的信仰と謂つても内容上正邪善惡の存することは勿論である。即ち天國に結ぶ戀とか言つて、佛教の所謂天の一部分の存在たる神を我等人間の救世主と仰ぐ、宗教的な信仰もあれば、本佛釋尊の方便權説なることを知らずして西方十萬億土の彼處の佛のもとに於て往生すると説く如き、歴世的な宗教信仰が現代の文明社會に儼然と存在してゐることは事實である。又醫術の發達したる現今に、病を治することをもつて、宗教本來の使命なりと考へ、社會人をして迷信の邪道に誘導するは無論のこと、他を顧みず利己的にして、打算的私利私欲に耽つてゐる宗教家が存在し、且つ彼等は社會的に觀て相當の地位にあるとは、誠になげ

かわしい次第である。尙それのみか、人間の弱點を把握して至極尤もらしき教説をもつて、惱み多き現代社會人已が信仰の圏内に入らしめてゐる、邪教と稱すべき宗教の存在がある。これ教團解散を命ぜられた邪教のある事實よりして明かであらう。

將たまた現今では邪義邪説中に法華經の思想を盗用しいかにも自家の極説の如く喧傳し、信仰せしめてゐる有名無實の宗教のあることも、時代進展上面白き現象である。

以上述べし如く、信仰の善惡邪正に付いては枚擧に違がない、然し正信と迷信の境界は、地圖上に表はれたところの國境線の如く判然と區別する譯けには行かないと思ふ。正信と迷信は表裏竹膜を隔つが如き關係にあつて、明晰判明し難い觀がある。

然りと雖も正師の正教は、どの角度より觀察しても、正教でなくてはならない、故に宗教的信仰の醍醐味を求むるには、謂ふ迄もなく、釋尊一代五十年の説法中、出世の本懐であり、佛教の最極説たる法華經を措いて、他に何物もないと信ずる。この法華經の根本精神こそ、我等大和民族の根本的精神即ち日本精神に外ならぬ。

こゝに於てか、吾々は幸ひにも生れ難き人間と生れ、

世界に比類なき神聖なる國家に生を得、遭遇たてまつること難きところの法華經に遭遇たてまつり。地涌の菩薩にあらずんば唱へ難きところの御題目を、心安く朝夕に唱へ奉つて日常生活を過し得るとは、誠に幸福なことである。

而してこの法華經の宗教的信仰の實踐的方面たる信念口唱の最易行に依つて、名宗即の荒凡夫は一躍肉身その儘にて、本佛釋尊の境地に達した時、宗教的信仰の究極目的たる即身成佛の大果を得るに到るのである。

故に宗祖大聖人は、十如是事に、  
『本覺のうつつの覺にかへりて法界をみれば、皆寂光の極樂にて、日來賤しと思ふ我がこの身が、三身即一の本覺の如來にてあるべきなり』  
と示し給ふてゐる。

然しこれ信仰心即ち宗祖大聖人の所謂信心を基礎として、題目を受持し讀誦し奉ること肝要である。

故に波木井御書に

『信心だも弱くば、いかに日蓮が弟子檀那と名乗らせ給ふとも御用ひは候はじ、心に二つましくて信心だも弱く候はゞ峰の石の谷へころび空の雨の大地へ落ると思食せ、大阿鼻地獄疑ひあるべからず云云』

と誠示し給ふてゐる。されば宗教的信仰の、いかに重大であり、且つ人間生活に缺くべからざること明白であらう。然るに現今は長期抗戦に設へて缺後の護りの堅實を要求してゐる。國家に於ても、國民精神總動員運動及び所有る物資に對して統制しつゝある今日、我等日蓮門下の弟子檀越は宗祖大聖人の異體同心の祖訓を奉持し、日本精神涵養に努め、國家社會世界人類を同化せしめねばならぬ。

東洋永遠の平和確立のため、正義日本の軍人は正義の利劍をもつて、斷乎膺懲し、連戦連勝武勳赫々たること日輪を見るが如きである。蓋しこれ人間業の到底及ぶところにあらず、一重に陛下の御稜威の然からしむるところであり。將た又忠勇なる帝國軍人の滅私奉公の献身的努力に俟つものである。これぞ日本武士道精神の發揚に外ならぬ。この精神の根據が奈邊にあるかを考察せんに、これ日本建國の精神に基くものと言ふべく、この建國の精神とは即ち法華經の精神であり、宗祖大聖人の精神であること疑ふ餘地がない。即ち日蓮が弟子檀那等は臆病にては叶ふべからずと宣ひ給ふは、これ日本武士道精神の根據と謂ふも敢て差支へないと信ずる。即ち宗教的信仰の信念の不動なる顯れとしては、實に皇軍向ふと

ころ敵影なく、無敵日本の武威を世界に示し、光輝燦然たるものがある。

斯くの如く、宗教的信仰は我等の生活をして意義あらしめ、價値あらしむるところのものである。

故に我等同心の門徒は、益々信心強盛にして、宗祖大聖人の御聖訓に遵守して、國家のため護法のため、大いに活躍奮闘し以て、社會に貢獻せざんばあらず、現今は實に日蓮門下の奮起すべきの時である。宗祖の所謂身輕法重死身弘法の精神は即ち日本武士道精神なること前述の通りであるが、この堅忍持久確固不動の精神を繼承せる我等同心の行人は、よろしく四海歸妙玉佛冥合の理想實現に一路邁進せざるべからず。蓋し宗教的信仰に培れた信念の偉大なるを認識する共に、眞の人間生活は宗教的信仰を俟つて、始めて意義を生じ、こゝに於てか、人間の價値は必然的に生ずるものと思ふ。されば若し宗教的信仰なかりせば、人間生活の意義生ずるに到らず、人間としての價値も存しない譯けであるから、宗教をもつて阿片なりと謂つた人間の存在たるや、誠に疑しき存在であり、これ眞に宗教そのものの本質を辨へざるのみならず、宗教本來の使命の重大性を知らざる族なりと謂ふべきであらう。(完)

(九月二十七日脱稿)